

青森県女性のあゆみとくらし研究会編

『津軽漁村における女性の生活誌』

小林亜希子

(一) 本書の性格と位置づけ

本書『津軽漁村における女性の生活誌』について述べる前に、まず平成十一年に青森県女性史編さん委員会によって刊行された『青森県女性史―あゆみとくらし―』について言及せねばならない。同書は、全体が「通史編」と「聞き書き編」とに分けられ、さらに「通史編」の中で特に「生活誌編」では、民俗学的な聞き書きの成果を基に青森県域の女性の生活と女性が担ってきた文化の概観を示している。ただ惜しむらくは、叙述の基礎となった調査対象が、津軽地方については農村部に限られていた点である。そこで、本書はその題名の通り『青森県女性史』の「生活誌編」を補完すべく、津軽地方の漁村部を取り上げ、当地域で展開されている女性の生活と文化を、主に聞き書きによって再構成している。

本書では、「西浜」と呼ばれる、日本海に面した漁村と、「上磯」と呼ばれる陸奥湾内の地域から四つの村を選び、調査対象としている。四村の内訳は、「西浜」から津軽半島北端の小泊・市浦の二村と、秋田との県境に近い最南端の岩崎村を選び、「上磯」からは蟹田村を選んでいる。津軽の漁村全ての実態を調査により網羅することは不可能としても、本書で取り上げられた四村は津軽地方のなかでもそれぞれ異なる特徴を持

つ地域であり、津軽地方としての一定の傾向を把握しつつ、地域ごとの比較をおこなうことも可能となっている。

(二) 本書の構成

本書は、小熊健氏による第一部「漁村の女性と生活規範―生業と生活共同から―」、長谷川方子氏による第二部「漁村の女性の生活実践―通過儀礼を軸として―」の二つの柱からなっている。

第一部では、村から見た女性の位置づけとして、家・村の生業と女性の労働の様相、社会生活が描かれている。今回調査対象となった漁村はいずれも、漁業以外にも様々な生業を有している。ここでは家・村の生業の概観を捉えた上で、その中で女性がどのような役割を担っているのが示される。第二部では、女性から見た家・生活のありかたとして、家における女性の一生を追いつつ、それに伴う人生儀礼や家族生活のなかでの女性の位置や役割の変化を示している。

(三) 本書の内容

第一部においては、まず「沿岸部の生業」として村の生業とそれに伴う労働の全体を俯瞰しているが、その中に「女性」という視点を持ち込むことで、労働の具体相をより実際の生活に即した形で再現しているところが特徴的である。漁村の生業といえ、これまでは漁業にのみ関心が向けられがちであり、仕事がどのように分担されているかといった問

題にはあまり注意が払われてこなかった。しかし本書の調査対象である漁村の生業の記述からは、漁業に限っても漁に出るだけではなく、漁獲物の加工、さらには行商、漁具の直しなど、いわゆる「オカの仕事」があり、他方では農業や塩とり、炭焼きといった多様な労働が同時に存在していたことが分かる。本書では、それぞれの労働の場面における女性の位置・役割に焦点を当てること、とすれば男性主体に考えられがちな漁村の生業も、実際には女性の労働力なしでは成り立たないものであったことを示している。多様な仕事を効率的にこなすべくには、家の労働力は最大限有効に使われねばならず、家の生業は女性や子供を含めた家族全体の分担に支えられていたのである。

さらに「女性」という視点から考えれば、本書において特に女性による仕事の工夫や生活の改良への取り組みに注意が払われている点は非常に興味深い。家・村の中の女性のありかたを見ていくとき、これら積極的に変革を求める姿勢のあることは、女性が決して日々の仕事や社会生活を受動的にこなすばかりの存在でなく、主体的に行動し、あるいは家や村の生活を中心となって支えてきたということを実に表しているといえよう。

また「女性史」という枠組みを取り払っても、本書が津軽漁村研究の資料として重要な役割を持つであろうことは言うまでもない。調査対象となった各地域を比較すると、同じ津軽の漁村であっても、労働の内容や質に地域による差異が明確に表れている点は注目に値する。例えば小泊村における男女の役割分担では、船に乗る女性が小泊地区にはかなり見られるのに対し、下前地区にはほとんどいない。こうした差異がどの

ような条件のもとに生じてくるのが、今後追求されねばならないであろう。

次に「生活からみた人間関係」では、村における共同労働や社会的結びつきを取り上げているが、これもやはり「女性」という視点を通して見直すことで、社会関係の新たな側面を見出すことができる。従来、女性の役割は家の維持を中心に考えられ、家の外のさらに広い共同体である村における役割は軽視されてきた感がある。しかしここでは、女性の枠組みを越えた地域の労働力として、常に村における自らの位置を示していたことが明らかにされている。また、舅や夫のケヤクの付き合いを、女性が夫の亡き後もその関係維持に努めるなど、女性が労働以外の場面でも家同士の連携や共同体の維持の担い手として中心的な役割を果たしていたことが示され、女性の社会的な役割の重要性がうかがえる。

第二部では、日常の生活や家事、または冠婚葬祭といった儀礼などが女性にどのように意識され、実践されてきたかが個人の体験をもとに再構成されているが、ここでまず画期的であるのは、記述が「結婚」、「出産」、「嫁としての役割」というように女性の一生に沿っている点である。一言で「女性」と言っても、娘、嫁、姑というようにその立場は一生を通じて様々に変化する。それぞれの場面によって家庭内・地域内で求められる役割が異なってくるということは、漁村に限らず女性生活誌を考える上で常に注意を払わねばならない問題であろう。

また、ここでは単純に古い生活習俗を採集するというよりもむしろ、大正から昭和にかけてこの地方の女性たちが実際に体験してきた生活や

文化の具体相を把握することに重きを置いている。このことも第二部の大きな特色といえる。

第二部の記述を通して感じ取れることは、一生を通じて、女性のありかたが二つの方向性を持っていることである。家・村の成員として家の労働を分担し、共同体を維持していく方向と、出稼ぎ・奉公など家や村の枠組みを離れて活動する方向である。結婚前は、娘は必ずしも家と地域に属するばかりの存在ではないが、「結婚」において女性は共同体を維持する役割を明確に保持するようになる。「生きる手段としての結婚」とあるように、大正から昭和初期の農村や漁村の女性にとって結婚は家同士の結びつきであり、結婚するのは当り前のこととして受け入れられたことがうかがえる。そして女性は結婚、出産などを経て次第に新たな共同体に認知され、嫁として、のちには姑としての役割を引き受けて、その家と村の共同体の維持に不可欠の存在となっていくのである。

こうした女性の生活と役割は同時に、女性が家や村という共同体の価値観によって縛られ、抑圧されてきたという一面をも指し示しうる。しかし、女性がただ苦しみ耐えて毎日を送ったわけではないことは、本書の随所に表れる生活の知恵や仕事の改良・工夫、あるいは日々の楽しみの記述からも明らかである。従来の民俗学の報告書ではあまり重要視されてこなかったこれらの事例は、女性の知恵や技術には家を維持するために代々伝えられてきたものがある一方で、女性が実際の生活と自らの経験をもとに新たに改良・獲得したものが存在することを示している。

長谷川氏はここで意図的に「実践」という言葉を用いている。女性は、

共同体の維持を最大の目的として生活に関わる様々な知識や技術を受け継ぎながらも、それを無批判にただ繰り返すのではなく、自らの経験をもとにより積極的に改良・工夫し、あるいは新たな知識を取り入れつつ行っていた。こうした努力の様相が著者の言う「実践」であり、これこそが家や村といった共同体のなかで女性が担ってきた役割の重さと生活の困難を示しているといえるだろう。

(四) 本書の意義・課題

私は、これまで津軽地域の漁村調査を行なう中で、女性の位置や役割といった視点にあまり注意を払ってこなかった。しかし本書において、漁村の生活誌を「女性」という切り口から眺めることによって漁村における女性の姿が明らかにされただけでなく、生活や労働の様々な問題が整理され、また新たに発見されたことは非常に意義深いものである。

本書で提示された資料が、今後の女性史研究、漁村研究にどのような活用され、つながれていくべきかについて、私見を述べたい。

本書は、主に聞き書きから生活の様相や民俗事象を再構成するという性格上、ここに取り上げられた時代は大正から昭和にかけてということになる。この時代は津軽の漁村においては生業の変遷が著しかった。そういういった変化の様相、そしてそれに伴う村や生活の変化のより動態的な把握がなされていなかったのは残念である。全国的に見ても社会変動の大きな時代を生き抜いてきた女性が、技術の進歩や改良にいかに対応してきたかを見ることは、女性の生活と労働への意識を考える上で重要な

材料となるはずである。

また、本書で女性の労働の具体相は明らかになったが、女性の労働が男性・子供・老人など労働力全体の中でどのような位置にあるのかが示されていない。多様な生業に対して家の労働力が一日ごと、一年ごとどのような割りに振り振られていたのかに着目することで、それぞれの生業における女性の位置と役割がより明確になるのではないか。

さらに、「おわりに」において小池淳一氏が指摘している通り、漁村の女性の生活は必ずしも家・村という共同体のなかでのみ把握されるものではない。行商や出稼ぎのような、共同体から離れた活動をどのように捉えるかといった問題が残っている。特に漁村において、行商は女性の仕事として位置づけられていることが多く、直接の現金獲得の手段であると同時に、行商に行くルートの決定や値段交渉など個人の才覚や知識が必要とされる仕事でもあった。こうした特徴から、行商が家や村といった共同体の成員としての労働とは違った意識で取り組まれていた可能性が考えられる。

最後に、本書の記述の方法について触れたい。本書では個人の体験を収集・再構成することで平均的な女性の姿を描いている。この方法は、漁村における女性の概観を知るには効果的であるが、個人の偏差が見えにくい。今後は、さらに個別のライフストーリーのデータを集積することで、「女性」とひとくくりにはできない世代・階層、あるいは個人の資質といった問題を明らかにしていくべきであろう。

しかし、このような課題は本書の成果の上に浮かび上がってきた問題である。今後の青森県の女性史研究と、津軽の漁村研究においては、本

書の成果を踏まえた上での問題提起と研究の発展が望まれる。

(A4判、六七頁、青森県女性のあゆみとくらし研究会、

平成十五年三月、非売品)

(こばやし・あきこ 弘前大学大学院人文社会科学研究所

修士課程一年)